

- 7) *Bibliography: Works on Library and Information Science*. 2 vols, 1974 (KWIC Index Series for Social Sciences, No. 4)
- 8) Y. Matsuda and S. Matsui "Effectiveness of KWIC Index as an Information Retrieval Technique for Social Sciences." *Hitotsubashi Journal of Economics*, 15-2, 1975.
- 9) 当時の分類を利用して著作家の蔵書目録の意義を検討したものに津田内匠『チュルゴの蔵書目録—フランス国立図書館所蔵の手稿による』3 vols. 1974 に付した「Turgot (1727—1781) の蔵書」がある。

福田徳三と武藤長蔵 —チャイルドをめぐる—

杉山忠平

福田徳三は『経済論叢』第1巻第1号から第3巻第5号にかけて、6回にわたって「でうみつど・ひゆーむノ経済学説」を寄稿した。1915(大正4)年から1916(大正5)年にかけてである。この一連の論文は、その表題にもかかわらず、ヒュームの経済思想の研究ではなく、むしろそれにさきだつイギリス重商主義の概観というべきものである。おそらくそのために、福田はこれを彼の『経済学考証』(1918)に収録するにあたって、表題を「英国の学問としての経済学殊に商国主義の始終」と改称した。福田のいう商国主義がマーカントェリズムを意味することはいうまでもない。

その連載第2回のなかで福田はジョウサイア・チャイルドを扱っている。「ちゃいどの著作中最モ普ク知ラルモノハ A new discourse of Tradeニシテ予ノ蔵スルハ千六百九十八年刊行ノ本ナリ。(版数ヲ明記セズ、予ハ之ヲ第四版ト考フ)。」1698年版を第4版とする推定は誤りだが、やむをえない。「此書物初メハ Brief observations concerning trade and interest of money ト題シテ千六百六十八年ニ出版セラル。其ノ Discourse of Tradeト改題シタルハ何レノ印本ナリヤ予ハ之ヲ見ザルガ故ニ知ル能ハズ。」こう書いた上で、福田はマカロックの *The literature of political economy* (1845) から、この本の初版は1668年に、大幅に増補された第2版は1690年に出たという一文を引用する。「察スルニ此千六百九十年版ニ於テ改題シタルモノニアラザルカ。少クトモ千六百九十四年刊行ノモノニ A new discourse of trade, wherein is recommended several weighty points……The second edition ナルモノアルコト丈ケハ確ナリ。(此書高商書館ニ在リ……) 其特ニ第二版ト明記シアルヲ注意ス可シ。まかろつ云フ所千六百九十年版本ナルモノ果シテアリヤナシヤ」。つまり1668年の *Brief observations* が初版で、「高商書館」すなわち東京高等商業学校の図書館にある1694年の *A new discourse* が第2版だとすると、マカロックのいう1690年版は本当に存在するのだろうかというわけである。この疑問は、もちろん、まちがいである。

しかし、マカロックが「其目録ニ掲ゲタ」のは1751年版だから、彼が実際に1690年版を「自ラ見タルモノナリヤ聊カ疑ハシ」という疑問はおそらく正しい。わたしもマカロックは「それぞれの〔版の〕あいだの推移をしっている様子がない」と書いたことがある。⁽¹⁾

福田はマカロックが1751年版を第5版としていることをあげ、「然レバ版本ノ種類ハ凡ソ左ノ如クナル可シ」として、推定結果を列記している。⁽²⁾

- | | | |
|-----|---------|--------------------|
| 第一版 | 改題以前ノモノ | 一六六八年刊(私蔵本) |
| 第二版 | 改題ノ第一版 | 一六九〇年刊(見タルコトナシ) |
| 第三版 | 改題ノ第二版 | 一六九四年刊(高商蔵本第二版トアリ) |

第四版 改題ノ第三版 一六九八年刊（予ガ蔵本是也）

第五版 改題ノ第四版 一七五一年刊（慶応書館本）

これにたいし、翌1917（大正6）年、武藤長蔵は『国民経済雑誌』第22巻第2号、第3号で福田批判を展開し、さらに第23巻第4号で自説を補足している。彼は福田が上のような考証の試みのうち、ヴィルヘルム・ロッシャー、アウグスト・オンケンらの誤りを指摘した点にふれ、「福田博士ハカク独逸学者中誤ヲ記スルモノヲ攻撃シテ、英本人モノサハル精細ナル考証ヲ試ミラレタリ。サレド予ハ自ラ考証シ且ツ確証ヲ有スル上ヨリ福田博士ノ考証ノ尚不完全ニシテ、千六百九十三年出版ノA New Discourse of Tradeノ存在スル事ヲ全く看過サレタルモノナレバソレダケ不完全ナル事ヲ茲ニ予ハ主張発表シ福田博士及ビ他ノ諸先生ノ教ヲ仰ガムト欲ス」といっている。

武藤の論説には反復が多く、また冗漫に流れる傾向があるが、「サレド」以下の短い文章にもすでにその一端があらわれている。福田の後述のような反応を招いた一因もそうした傾向にあるかもしれない。ともあれ文中「予ハ自ラ考証シ」以下には強意を示す傍点が付してあり、旧師にたちむかう武藤の気負いのほどが思われる。

彼はつづけていう。「予ノ目下ノ解釈ニヨレバ、コノ千六百九十三年版ハA New Discourse of Tradeト改題後ノ第一版ナルベク、千六百九十年版ノモノハ他ノ名稱ヲ用ヒタルモノニアラザル乎、而シテ其書名ハ如何。コレニ就テ予ハ未ダ考証正確ナラザレド、キャンナン氏ノ著書中記サル処ヨリ推シテ、千六百九十年ニハA Discourse about Tradeナル題ニテ出版サレシモノト察セラルト解セムト欲ス。」

「キャンナン氏ノ著書」とは *A history of the theories of production and distribution* (1893) のことである。キャンナンはなぜか引用の底本としては第4版 (n.d.) を用い、それでいて索引には第2版をあげて '*A New Discourse of Trade, 2nd ed., 1694 (1st ed. entitled A Discourse about Trade, 1690)*' と記している。この点について武藤は「千六百九十年ノA Discourse about Tradeナル名稱ニ注意スベシ。或ハA discourse concerning trade &c.ナル名稱ナリシ乎トモ予ハ推測シツツアリ」という。aboutでなくconcerningではないかとも「推測」される理由として、彼は彼のみた1693年版の目次的部分に、'*The Contents[.] First[.] A Discourse Concerning Trade, &c. Chap. 1……*' となっていることをあげている。そして「何故ニ……Firstナル文字ヲ附セシカ、予ニハ其理由判然セズ」といったり、「其Firstノ意ハ、不明」といったりして、こだわっている。だが、それはまずトレイドについての一論文を収め、次には高利に反対する一小論文 (*A small Treatise against Usury*) を収めてあるという意味でのFirstにすぎない。A Discourse Concerning Tradeとは、*A small Treatise against Usury* と同様⁽³⁾、内容の要約的表示であって、書名を意味してはいないのである。

しかし武藤はこのFirstに困惑しつつも、「若シ千六百九十年刊ニチャイルドノ著述出版セシモノトセバ、コノA Discourse Concerning Trade &c.ナル名稱ヲ以テ、千六百六十八年刊ノ*Brief observations……*ト題セシモノヨリ改題セシニハアラザル乎」と書き、あとではまた「予ノ疑問ハ、一六九〇年刊ノ存在ニ関スル疑問ニアラズ、其本ノ名稱ニ就テノ疑問也」とも書いている。疑問なのは1690年版の書名であって、その存在ではないというのは、福田が存在自体を疑問とするかのようにもとれる口吻で書いていたのを念頭においたものである。

福田は武藤の批判に答えなかった。わずかに『経済論叢』所載の論文を『経済学考証』に収録するにさいして、上に引用した「然レバ版本ノ種類ハ凡ソ左ノ如クナル可シ」を「然れば版本にして重要なものは」という表現に変えて逃げ、その次を「（此外に版本あること勿論なれども其は重要な関係なしと信ず近頃武藤長蔵氏は或版本を得たりとして屢々煩雑なる考証を公けにすれども學術上何等の新見を加ふるものなし）凡そ次の如くなる可きか」と補正している（395ページ）。

「或版本を得たりとして」というのは、1693年版の *A new discourse* のことである。つまりC.H.Hullが彼の編集した *Economic writings of Sir William Petty* (1899) のなかでチャイルドの著作として

‘Brief considerations concerning trade……London,1668’（もちろんハルの書名誤記）と、‘A new discourse of trade, London,1693’をとあげている（p.663）ことから、「千六百九十三年ロンドン出版ノモノアル事ノ見当ヲツケ」と同時に、たまたまロンドンの古書店のカタログにも同版があることを「発見」し、購入しえたと、いきさつを書いているものことである。

福田はこの版があたかも「重要なもの」でないかのように武藤の主張を黙殺する態度に出たのだが、いうまでもなく、これは不当である。武藤が彼の勤務先（長崎高等商業学校）のために購入したこの版こそ *A new discourse* という書名で出たものの初版だからである。

この論争は数十年を経過したいまでは、当然ながら、歴史的意義以上の意義をもたない。武藤は *A discourse about trade* か *A discourse concerning trade* かのいずれかから *A new discourse of trade* への「改題ハ千六百九十三年ニ至リテ初メテ行ヒタルモノ」であって、この93年版こそ「カク改題シタルモノ、第一版也トノ説ヲ予ハ茲ニ発表」するのだといっているが、これはもはや「説」を「発表」したりする種類のこではないからである。同様にキヤナンによれば *A discourse about trade* だが「予ノ臆説」によれば *A discourse concerning trade* だと武藤のいった1690年版も、「臆説」でどう考えるという種類のこではないからである。

1690年版については後日譚がある。後年、武藤を追憶して伊藤久秋が書いた文章によると、伊藤は「大正末年」在英中にゴールドスミス文庫のなかに「今まで知らなかったチャイルドの版本、*A Discourse about Trade, 1690*を発見」し、書店にさがさせて入手することをえて、帰国後それを武藤に呈上した。福田・武藤の「両博士とも明に、かかる版の存在をご承知なかった」と彼はいうが、それは彼の誤りである。すでにみたように、福田は「見タルコトナシ」とし、また若干の疑念を抱きつつもこの版をあげており、武藤は「臆説」によりつつもその書名の推定を試みているからである。ともあれ、福田も武藤も「ご承知なかった」のだから「この版の発見は論争の焦点にふれるものではないが……これに一石を投ずるもの」ではあるはずだ。そう考えて彼は武藤の反応を期待したが、武藤は「終にウンともスンとも言わず、いわんや例の考証論文を発表されることもなくして終ってしまった。『先生もずるいぞ』とは私の卒直な感じであった」と彼は回想している。⁽⁴⁾

この主題でエッセイを書くようにかねてからわたしを誘ったのは、あるいはむしろ、のちに伊藤による武藤追想文の存在を教えることによってわたしにそれを動機づけたのは、畏友杉原四郎である。わたしはその昔武藤文庫を一見すべく彼とともに長崎大学を訪れた日のことを思いだす。いらい茫茫何年、今日に至るまで彼から受けた友情や啓発を思い、わたしはこの小文を彼に捧げたい気持で書いている。

それにしても、武藤が1693年の *A new discourse of trade* の初版について、他書からこの版の存在の「見当」をつけ、古書店の目録中にも「発見」して、注文し入手したと書いていることといい、伊藤が1690年の *A discourse about trade* について、ゴールドスミス文庫のなかにこの本があることを「発見」して、古書店にさがさせて入手し武藤に呈上したと書いていることといい、今日からみると、牧歌的とさえ思わせるほど歴然たる相違である。事情への不精通もそうであるが、それはそれでやむをえない。それよりもむしろ古典の実物の入手の容易さが読むものに隔世の感を覚えさせずにはいないのである。入手の容易さには、もちろん、廉価さも含まれよう。廉価さは伊藤が武藤に気軽に呈上していることから推定できるであろう。だが、それにもかかわらず、彼らの世代が古典に傾けた熱情そのものは、いまなおわれわれにとって示唆的であるといつてよいのではなからうか。

ところで武藤が「厭々煩雑なる考証を公けに」したけれどもといって、福田が彼の批判を無視したことについては、さきにふれた一因らしいもののほかにも、おそらく理由があった。武藤は福田を訪ねたとき、左右田喜一郎が珍しい版をもっているからみせてもらうようにと——後掲注2参照——福田にすすめられたとも書いている。武藤は左右田所蔵の版は著者名の次に *Baronet* の称号がえられている珍しい（じつは珍しくないのだが）版だといっているが、これは彼がそのとき福田からきいたことをあたかも自説

のように述べているのではないか。彼はまた1693年の*A new discourse*には販売者名が明記されているのに1668年の*Brief observations*には示されていないから、後者は市販されなかったのだらうとされているが⁽⁵⁾、この点についても同様の可能性が考えられる。さきにみたように、福田は後者を「私蔵本」としているのだが、それは福田自身の所蔵を意味せず、著者チャイルドの私家版を意味したものであろう。すぐそのあとで彼が所蔵するのは1698年の*A new discourse*であるということ——「予が蔵本是也」といって——ふたたびことわっているからである。じじつこの本は『福田徳三蔵書目録』（一橋大学附属図書館所蔵、1931受入れ）にも含まれていない。私家版との推定は——彼自身はもとより、彼からそうきいたとは武藤も書いていないが——思うに、「予が蔵本」には明示されている販売者名がこの本にはないということを根拠にしたのであろう。そして武藤はこの点でも彼を受け売りしたのではないであろうか。福田の黙殺的態度の背後にはこのようないきさつがあったことも考えられるのである。だが、それにしても、1693年版の存否は、既述のように、決定的であって、黙殺に値するどころではなかった。論争自体は武藤に分があったといわなければならないであろう。

1693年版は武藤が購入したもののほか、現在では東北大学や慶応義塾大学の図書館にもある。そして福田が「高商書館ニ在リ」と書いた94年版は、いまも紛失することなく「高商」の何代かの後身である一橋大学の社会科学古典資料センターにある。さらに同センターには福田の時代に所蔵していなかった68年の*Brief observations*も90年の*A discourse about trade*もある。ただし肝腎の*A new discourse*が、いまなお福田をつまづかせた当時のままに、93年の初版を欠いていることは、たとえ初版と第2版とのあいだに改訂による相違がないにしても、やはり惜しまれるべきであろう。

これら3点を含め、古典資料センター所蔵のチャイルドの著作を列記すれば、次のとおりである。書名のことなる(2)は当然として、(3)と(5)でも副題の一部をそえたのは、諸版のあいだで、主題は同一でも副題に相違——誤りの訂正を含めて——があることを例示するためである。各書名末尾の〔F〕はパート・フランクリン文庫、〔M〕はカール・メンガー文庫、〔R〕は一般貴重書を示す。

- (1) *Brief observations concerning trade, and interest of money, by J.C.*, London, 1668, 36p. [M]
- (2) *A discourse about trade, wherein the reduction of interest of money to 4l. per centum, is recommended. Methods for the employment and maintenance of the poor are proposed. Several weighty points……are seriously discussed,……Never before printed*, London, 1690, [73], 234p. [R]
- (3) *A new discourse of trade, wherein is recommended several weighty points……by Sir Josiah Child, the second edition*, London, 1694, [48], 238p. [R]
- (4) *Do.*, London, 1698, [48], 238p. [F]
- (5) *A new discourse of trade: wherein are recommended several weighty points……by Sir Josiah Child, Baronet, the fourth edition*, London, n.d., xlvi, 260p. [R]
- (6) *Do., the fifth edition*, Glasgow, 1751, xxix, 184p. [F]
- (7) *Traité sur le commerce et sur les avantages qui résultent de la réduction de l'intérêt de l'argent; par Josias Child, Chevalier Baronet: avec un petit traité contre l'usure; par le Chevalier Culpeper, traduits de l'anglois*, Amsterdam et Berlin, 1754, xii, 483p. [M]
- (8) *Do.* [R]

以上のほか同センター所蔵の*A treatise wherein is demonstrated 1. That the East-India trade is the most national of all foreign trades……by Philopatris*, London, 1681, 43p. [M]と*A discourse of the nature, use and advantages of trade. Proposing some considerations for the*

promotion thereof, by a registry of lands. Preventing the exportation of coyn……London, 1694, 31p. [R]との両匿名書がチャイルドのものとして分類されている(ゴールドスミス文庫やクレス文庫をはじめ、チャイルドのものとするのが通例であるように)が、いずれも内容において——後者に至っては書名においてすでに——チャイルドのものとはみなしがたいので、ここでは省いてある。

- (1) 杉山忠平訳、チャイルド『新交易論』, 東京大学出版会, 1967, 「解説」, 3 ページ。
- (2) 福田は『経済学考証』ではこれら5点に「第六版(改題の第五版)左右田博士蔵本(年号なし)」を追加している(395ページ)。左右田の好意で武藤もみたというこの版は、なぜか古典資料センターの左右田文庫中がない。
- (3) 原名は*A tract against usurie* (著者は*Sir Thomas Culpeper, the senior*) である。
- (4) 伊藤久秋『読書余録』, 崑書房, 1980, 188—9 ページ。
- (5) 武藤はこの推定はその後「市河三喜君ノ注意」を受けたところによると誤りらしいので訂正するとあとで補足している。sold by……がないから私家版だとは、もちろん、いえない。

(一橋大学社会科学古典資料センター教授)